

豊島新聞リリースエッセイ

ル画を描く」担当

TERRA・土の風景

二月の個展のタイトルをTERRAとした。イタリア語で土、大地、地球を意味する。土地や領地も意味するのだが、土とは生命を育み、人が便利に暮らすための資源も内包する有難い地球のこと。美味しい食材も、美しい風景も、すべてこの母なる大地の賜物。この土を育て、守る人たちに感謝。

土にも土地々々で赤土、黒土、白土、黄土、緑土などいろいろあるが、すべて土地として、地球として繋がっている。領地として奪い合うのではなく、分け合えないのだろうか。住み分けも必要だが、同じ地域の人として共生できないものだろうか。人は便利な物を作る動物だが、今、便利さを求め過ぎる余り、地球が汚れている。資源を奪い合い、富を奪い合うのではなく、同じ地球に住む人として、運命共同体の意識をもつべきではないのだろうか。

一息ついて、少しゆっくり歩んでもよいのではないか。夏は夏らしく、冬は冬らしく暑さ寒さがあってよいし、夜は夜らしく闇夜や月夜があつてよい。そんな自然も大切にしたい。孤独であるということ。考えること。そして眠ること。そんな時間も大切にしたい。

神尾 和由（「絵を基礎から学ぶ」「パステ

美容院にて

美容院での会話というのが苦手なせいで美容院へ行くのが長いこと苦痛だったのだけれど、今のところに引っ越してから通い始めた先で担当してくれている人との会話はちよつと楽しい。彼は私が〈詩を書いている人〉だということを認識していて、たまにそちら方面の話題をふってくる。この間の会話はこんな感じ。

美容師さん「：オノマトペっていうんでしたっけ？」

私「擬音のことですか？ うん、オノマトペ」

美「僕、教科書で読んで印象に残っているのがあるんですよ。

ゆ：……なんかブランコの」

私「ゆあーんゆよーんゆあゆよん？」

美「そうそう、それっ」

私「中原中也の『サーカス』ですね。〈幾時代かがありました／茶色い戦争がありました……〉」

美「うわあ、それです！ あと、もうひとつあったんですけど、えつと」

私「もしかして、どつどつどつどうど？」

美「そうですっ！」

私「『風の又三郎』です、宮沢賢治」

美容院に何をしに行っているのかわからない。そして、お返

しのように彼は革新的な道具（銃というより剃刀のような形状の）を見せて解説してくれ、たいへん面白かったのだった。

川口 晴美（詩人「詩を書こう」担当）

明治三大冒険

向島にある言問団子の店の前に「言問団子と郡司大尉」という説明板が立っている。郡司成忠大尉（幸田露伴の実兄）は同志約八十人と共に、明治二十六年三月、この隅田川畔から端艇五隻ではるか千島探検に出かけたのである。

しかしこれはあまりにも無謀な冒険だった。船の遭難や離散が相次ぎ、北千島の占守島にたどり着いたのはわずか七人。しかも日清戦争勃発のため大尉は引き上げ、残る六人の半数は脚気で死去、愛犬を食料にした三人だけが生き残った。

他にも福島中佐のシベリア単騎横断がある。これは、明治二十五年二月から一年四カ月かけて、最低で零下五十度まで冷えた厳寒のシベリアをたった一人で渡ったものだ。

また昨年ドラマにもなった野中到・千代子夫妻の富士山越冬観測も当時無謀といわれた。明治二十八年十月から十二月下旬まで、最後は高山病で下山を余儀なくされた。

世に明治三大冒険といわれるが、いずれも日清戦争前後に集中している。

本当に命を賭けた冒険をやるという若者が今の日本にいるだろうか。時代が違うといえばそれまでだが、明治という時代

が持っていた強烈な気概が少し羨ましく感じてしまうのである。

佐藤 孔亮（「川柳入門講座」 「江戸切絵」担当）

3・11の日の池袋駅前

二〇一一年三月十一日午後二時四六分、私は池袋駅前のビルの地下室にいた。ここ、淑徳大学のサテライト・キャンパスと道路一つ隔てたビルである。経験した事のない大揺れに思わず机の下に身を隠した。その後はビルも緊急体制になり、電車が止まっているので、動き出すまでここに居てもよいと放送があったが、時間潰しにデパートに居ようと思ひ外にでた。ところが、デパートもパルコも店内の客を出して、シャッターを閉めようとしている。人がいろんな建物からぞろぞろと出てくる。バスは動いていた。バス停には長い行列。何が起こったのだろう。不安な気持ちで駅前の曇った空を見上げたのが忘れられない。西武線の改札口には、電車が動くのを待つ人々が大勢。携帯は繋がらない。公衆電話を見つけ、家に連絡を入れた。JRもあの大きな通路を閉じようとシャッターを下ろし始める。あわててそこを潜り東口から西口に出た。西口からは練馬方面のバスが出てくるからだ。何処行きでも良い、家に近づこうと思ひ、ともかく手近なバスに乗り込んだ。東北地方に津波がきていることをバスの中ではじめて知った。その後は歩いたり、バス

を乗り継いだり、夜の十一時過ぎに家にたどりついた。

沢口 芙美（「短歌の実作と秀歌鑑賞」担当）

新春のお茶、華やぎの器

一年のはじまりにふさわしいお茶といえば、「大福茶」。京都など関西中心にお正月に飲まれる縁起物のお茶で、ベースになるお茶は、玄米茶だったり煎茶だったりする。

よるこぶの結び昆布、しわが寄るまで長生きの梅干し、まめに働くの黒豆、そして金箔など、縁起物の素材をブレンドした、和製ブレンドティーである。

平安時代に空也上人が疫病に苦しむ民へ、梅干し入りのお茶を振る舞い、疫病が収まったことから、時の村上天皇がこのお茶を飲むようになり、天皇の茶という意味の「王服茶」と名付けられた。やがて一般に広まり大きな福をつかむ「大福茶」として今に伝わっている。

一年の無病息災を願って飲む京都発祥のお茶に合わせたいのは、京都の陶工、叶松谷氏の湯呑。

美しい赤地に華やかな金箔を散らした湯呑は、代々京都の料亭や料理屋の器を作ってきた歴史と風格が感じられ、新春らしい華やかな逸品だ。

渋谷 千恵（「世界のお茶とお菓子」担当）

経済苦から画家となった光琳

日本古来のやまと絵を基に、和風趣味と優れた意匠性が加わり制作された「琳派」の作品。今日の美術にまで大きな影響を及ぼす琳派の名称の元となった尾形光琳は、日本絵画の歴史の中で最も人気のある画家の一人である。

光琳は京都で隆盛を誇った呉服商雁金屋の次男に生まれ、弟に陶工として名を成した乾山がいる。雁金屋は桃山から江戸前期にかけて浅井長政の娘淀君等を顧客として大いに栄え、父宗謙の代には後水尾天皇の中宮東福門院を最大の得意先とする等、絶頂期を迎えた。光琳は裕福な大店の令息として何不自由なく育ち、絵画、書、能、茶の湯等の芸事を嗜んだ。

21歳の時東福門院が逝去すると雁金屋は傾き始め、父の没後、家運は一気に衰退に向う。それでも派手な生活と放蕩の日々を重ね、経済は益々苦しくなった。遂には家伝の本阿弥光悦作の「鹿硯箱」や信楽水指、脇差や屏風等を質入れし、弟乾山からも借金をする有様であった。ここに至り最早経済的自立をせざるを得ない状況となり、三十代末漸く画家として生きる決心をした。江戸初期に活躍した敬愛する俵屋宗達の画を学び、次第に自己の作風を確立する。44歳の時本格的に画家を志してから僅か5年で名誉ある法橋の称号を賜った事からも、その実力の程が知られる。その直後に国宝「燕子花図屏風」が描かれた。経済的困窮が裕福なぼんぼんを、日本美術界を代表する画家尾形光琳へと導いたといえる。

清水 康友（美術評論家「江戸時代の絵画」

担当)

羈旅発思―中国・温州の旅―

杭州の空港から雨の中に色濃くシルエットが映る山々を車窓から眺めながら温州へ向かった。早稲田大学日本宗教文化研究所のメンバーとして温州医科大学での国際シンポジウムに参加するためである。「東アジア文化交流―人と物の流通を中心に―」というテーマのもと、日・中・韓の研究者が集い、十数時間にもわたって次々と日ごろの成果を披露する。自身も「遣唐使の文化交流と文学―『万葉集』編纂への志向―」と題して発表を行った。

温州から台州にかけては遣唐使所縁の地域として名高い。シンポジウムの翌日に行われた「考察」では、わずかの期間にも関わらず密教を学び、日本へ伝えた伝教大師・最澄の密教受戒の龍興寺や、源実朝が自らの入宋を企ててまで訪れることを夢見た雁蕩山・能仁寺などを見学した。龍興寺には再三の失敗にもくじけず、日本へ仏教の戒律を伝える使命に燃えてチャンスがつかけていた鑑真和上所縁の御堂もあり、人それぞれが持つ「使命感」の成せる奇跡を実感することにもなった。さて、自身はどうだろう。帰国の途に就きながらの反芻は答えの出るものではなかった。

城崎 陽子 (國學院大學講師 「万葉集を讀む」担当)

法華經信仰者の使命

戦後七〇年が過ぎ、日本では、「戦争を知らない子供達」が七〇歳になる時代を迎えました。私たち人間は、人類の祖先の成功も失敗も含めて、彼らのたどった試行錯誤の成果を受け継いで現代に生きています。ですから、歴史を学ぶ時は、そうした先人の努力や犠牲のうえに今の私たちがいることに感謝の気持ちをもつことが大切です。悲惨なる運命の繰り返しを防ぐには、犠牲となつた多くの方々の悲しみを後世に伝え、いかなる暴力も蛮行も許さないという段階にまで人類を進ませる以外にありません。非暴力に敗北はありませんが、暴力の果てには必ず敗北が待っているのです。

法華經では、私たちの住むこの現実の世界(娑婆)にこそ浄土があると説きます。天台大師智顛は、法華經の結經たる觀普賢菩薩行法經に基づいて、その浄土の名を常寂光土と呼び、日蓮聖人は法華經の如来寿命品の説示から靈山浄土と呼びました。そこには「我常常にここに住して法を説く」「常にここにあつて滅せず」「常に靈鷲山にあり」等の言葉によつて、二五〇〇年前にこの世を去られた釈尊の魂が、現在も靈鷲山(法華經説法の靈場)に留まり続けていることが示されます。つまりそこは、法華經信仰者の安住の地であり、この娑婆世界に併在する永遠の浄土なのです。差別も戦争もないこの浄土を現実の世界に顕現することは、法華經を信奉する者の使命なのです。

高森 大乘 (「法華經の講讀」担当)

今ココに生き 旅するために！…『あのときの夏』

あの時 昭和20年（1945年）夏
私は国民学校5年生だった

あの年の あの夏の あのときの空は 青かった
ほんとうに青かった 澄みきっていて怖いくらい……
二度とふたたび、あのような真つ青な空は
見ることがないだろう

私は金沢で生まれ 白銀町の旧い町家で育った
家のまえは電車で チンチン電車が通っていた

重大な発表があるからと、
向かいの自転車屋さんに
となり組の人たちが集まっていた
天皇陛下の声は、雑音が入って良く聞き取れなかった
独特の抑揚ある語り口だけが耳に残った
大人たちは、キョトンとしていた
誰かが言った 負けたんだと

あのとき わたしは軍国少年で
子供ながら
お国のために 命をささげる覚悟でいた

だが しかし わたしは毎日毎夜死を恐れていた
死はそこにいた

徴兵制度があり いつか赤紙が来て
兵隊になり 戦地に送られる
突撃の命令……そのうち間違いなく 弾は身体を貫くだろう

死ぬことは怖い 死んだらどうなる？
すべてが無！ この存在 この現実 この世界 この宇宙は
私が死ねばすべて消え去る

戦争は終わった
神国大日本帝国が負けたのだ
戦争に負けた

勝つことを信じていた そう叩き込まれていた
それが負けたのだ

全身の力が抜けた
空虚 むなしさ
涙が流れる 涙が止まらないんだ

全てがひっくり返った
これまで正しかったことが悪いことに
これまで悪かったことが正しいことに
食べるものが無い

腹が減つてどうにもならない
食べたい

腹いっぱいご飯を食いたい
弁当は40日間 さつまいもだけ
持つてこない奴もいた

苦しかった毎日 でも 精一杯生きていた

何もない

でも工夫して なんでも自分の手でつくつた

運動場を開墾して サツマイモ畑

山で樹を切り 薪づくり

日本海浜辺での 塩づくり

貧しいもの同志の妙な連帯感！

友だちにも 人びとにも 学校にも

村にも 町にも

野にも 山にも

大空にも

あのときは アツケラカンとした明るさがあった

あのときから70年……幾多の事件 闘争 危機 生活 時代
がありました

良いことも悪いことも ダダドド ダダドドと通り過ぎてい
きました

命有難く（今 ココニ）私は生きている

近澤 可也（淑徳大学公開講座「ふるさと未
来創生塾」担当講師）

「うれしかったこと」

先日講義を終えて帰路についた時、受講生に声を掛けられま
した。「前回の講座に出席した際、自転車を駐輪違反で回収さ
れ、5000円の罰金を支払うことになりました。でも先生の
話がとても参考になったので、5000円は惜しくないと思
いました」と言ってくれました。講師冥利に尽きる言葉で本
当にうれしくなりました。もう何年も前になりますが、日本女
子大学通信講座で集中講義した時に、「久しぶりに他人の話を
聞いて有意義だと思った3日間だった」、「先生にお会いして『知
識が深いことが人間の柔軟性に繋がっていく。それでこそ学ぶ
意義になるのだ』と思えました」、「巷に溢れる食情報に対し、
疑問を持ちながらも、確信が持てず、主流意見に従っていまし
ましたが、先生の話聞いて確信が持てました」、「急な雪でホテル
が取れず、スタッドレスタイヤを買いましたが、タイヤの価格
（69800円）を出した甲斐のある授業でした」、「この授業
で多くのことが学べ、毎日、今日はどんな内容なんだろうとわ
くわくして3日間過ぎました」、との評価を頂いたことがあ
りました。

いずれも、講義をして本当に良かったと思えた言葉でした。

次回も、同じような評価をして頂けるように、しつかり準備をしていきたいと考えています。

角尾 肇（医師「薬剤不要…自分でできる生活習慣病予防法」担当）

写真講座開講して十九年目

淑徳大学公開講座の写真講座は平成八年に開講して今年で十九年目となります。

開講当時から撮影実習で一眼レフカメラにリバーサルフィルムを使用して的確な露光、色再現を目指し、花・風景にはシャープネスで鮮やかな発色のフジクロームベルビア50、スナツプはフジクロームプロビア100の質感描写のフィルムをカメラに装着して撮影実習を指導してきました。受講初心者は、リバーサルフィルム使用は初めての人が多く困惑しながら撮影、現像後仕上がったフィルムの画像を見て、美しい画像に感動、また撮影失敗で黒色のアンダー、オーバーで白い画像に一喜一憂したものでした。開講の年に米国アトラクタオリンピックが開催され各国カメラマンはアスリートを追いかけて撮影していた。この時期がフィルムカメラ全盛期であった。平成五年コダックとキヤノン両社共同で業務用一眼レフデジタルカメラEOS DCS3シリーズが発売され、デジタル一眼カメラの幕開けとなるが、とても高価、フィルム画像に比べ劣っていた。平成二十年頃から当受講生全員デジタル一眼レフカメラに変わっ

た。短期間に高品質、低価格で一般に普及したお蔭である。

永島 浩二（写真家「楽しく学ぶ一眼レフカメラ写真講座」担当）

イカムネ・カラア

中原中也に出会ったのは高校二年のときだった。

『月は空にメダルのやうに、

街角に建物はオルガンのやうに、

遊び疲れた男どち唱ひながら帰ってゆく。

——イカムネ・カラアがまがってゐる——』

イカムネ・カラアの意味も分からず、ただただ何もかもが嘘っぱちの作り物と謳い上げる調子に魅かれ、

『ただもうラアラア唱ってゆくのだ』

という自棄くそのような、すてばちな気分が、その頃の自分そのものに思えて、妙に気に入ったのだった。確かにそのころは、やりたいことのひとつもなく（夢見る未来）というようなものもなかった。野球部に属していたものの、ほとんど満足に活動しなかったし、学校行事にも真面目に参加した記憶がない……。いや、高校3年の体育祭だけは積極的にやったな。それ以外は皆無。特に文化祭には縁がなかった。

「若いころから演劇が好きだったんでしょうね」

などとよく言われるのだが、ホントのところ、まるで興味なんてなかった。なにしろ『ラアラア唱って帰る』だけの自棄つ

ばち、すてばちな生徒だったのだから。

そんな人間がひよんなぎっかけて演劇の世界に入り、今では演出家のございなどとほざいている……。だから人生は分からないし面白いのだ。

永島 直樹（演出家「朗読講座中級」担当）

歌う魔力に取り憑かれて

声はどんな感情でも即座に表現してくれます。

喜び、怒り、嬉しさ、悲しさ：声を聴けばその人の感情状態が解ります。そんな人間感情を表現する方法として「歌」があります。歌はその背景に、その詩を書いた人の想い・感情があり、その曲を作曲した人の心が宿ります。その楽曲を自分の声で表現する事が「歌を歌う」という行為で、それはとても気持ちの良い、楽しい作業です。

しかし、その作業を存分に行おうとすると、やはり『楽器としての声の出し方』を学ばなければ難しい部分があります。

その楽器としての声を出す時に、何より一番大事なのは腹式呼吸です。声は喉だけで出すものではありません。体の全部を使います。歌を歌うという行為は、すなわち自分自身が楽器そのものになるという事。全身の筋肉を使って表現する藝術です。それは、あたかもスポーツをするように、身体全体から声を出す作業なのです。

自分の身体全体でその歌の感情を表現していく……何て素晴らしい

らしく、気持ちの良い作業なのでしょう！

時々ふと、何でこんな私が歌なんか歌っているのだろう？…と思う事がありますが、きつとこの不思議な魔力に取り憑かれてしまったからなのかも知れません。

根来 加奈（ソプラノ歌手「楽しく声を出しましよっ」担当）

「掛軸と旅への想い」

歳を重ねるということは、社会の余白に生きるということでしょうか！ この余白は自分の思いを気儘にそして豊かに過せる活力ある時間とも云えるかもしれません。

歴史関係の小説、随筆、紀行等を読んでいて、その歴史の舞台、背景、遺跡等々が気になり一度訪ねてみたいと思いつつながら時が経ってしまうのが常ですが、中国・唐時代の僧・玄奘三蔵の業績を唐の二代皇帝・太宗が撰した石碑「雁塔聖教序」の拓本を掛軸に制作する機会があり、掛軸を制作しながら、玄奘三蔵が歩いた西域シルクロードの道を訪ねてみたいと強い衝動に駆られました!! 思い切つてその衝動に駆られ行動することもひとつの縁かなと思ひ中国・西域シルクロードへの旅をいたしました。

黄河遠く上る白雲の間 一片の孤城 万仞の山
姜笛何ぞ須いん楊柳を怨むを 春光度らず 玉門関

（王之涣詩 涼州詞）

敦煌・玉門関を出、天山北路・トルファン〜天山山脈を越え、天山南路・コララ〜タクラマカン沙漠を縦断し崑崙山脈の北、西域南路ホータン〜カシュガルと沙漠周辺のオアシス都市をバスにて訪れました。乾燥した土の遺跡・交河故城・高昌故城等では人の営み自然の厳しさは机上では想像もできないと感じ、タクラマカン沙漠の粒子の細かい砂と無限の広大さを体感、イラム圏の沙漠周辺の都市では多様な人種・文化・風土・生活等々に接し世界の広さを改めて実感しました。玄奘三蔵が1300年余前に歩いた辺境の自然の風韻と悠久さに驚きました！ 人間・駱駝の歩む感覚からすると地球の広さは無限に感じるのではないのでしょうか。沙漠の水にあたり体重が3キロ余減量になり帰国しました、日本の緑と水蒸気に覆われた自然の優しさが身に沁みます。!!

長谷部 雄三（表装文化伝承支援協会理事・
「表装」担当）

いけばなから広がる世界―笑顔・感謝―

地元の東日本大震災チャリティーコンサートに参加しました。八歳から七十四歳（私です）までのギターサークルで、スタンド・バイ・ミー」と「ブリーズ・ミスター・ポストマン」を演奏。ビギナーの私は三つのコードで取り繕いましたがワクワクした良い経験でした。勿論、全員笑顔一杯。『笑顔は文化の核』を実感した一瞬でした。草月流は、お客様を前に後ろか

らいけるデモンストレーションを家元直接指導で学びますが、作品説明、想いを伝えなければなりません。プロの音楽家からの厳しい発声指導を受けながら、いつの間にか音楽の世界に。いけばなから広がる世界は無限です。

当流には家元が設けられたハードル高い『賞』があり、昨年も見事に落ちました。入院中の九十八歳の母に伝えると『あら、貴女のつきが私にまわって来たわ、とても体調が良いの、ありがとう』と。凄く落ち込んでいたのに、すっかり心が軽くなり、感謝々々です。

最近、『文化は継承するもの』の言葉が、ドーンと胸に響きます。いけばな歴五十余年、終着駅のない魅力の世界を継承しなければと思います。昔はピーンと張りつめた緊張の御指導を受けました。今は、『先生、私、ほめられると伸びるタイプなんです』、『私もです』と教室中が明るいコールです。ちよつと複雑ですが、悪くないと思っています。

家元の『行き先を知らなければ追い風は吹かない』を肝に命じ、基本をしつかり見据え継承に全力投球したいと切に思っています。

藤本 遙染（「笑顔になれる草月いけばな教室」担当）

抹殺考

文京区に護国寺という寺がある。数奇な寺で、この寺の歴史

をたずねると日本の近代化の層がうつすらと見えてくる。

名前が示すように国を守るために造られた、というよりも江戸の北部につくられた砦のひとつなのだろう。

五万坪の敷地を持ったこの寺院は、戊辰戦争後、建造物の敷地をのぞくすべてが明治政府のものとなり廃寺となる。東半分は二万五千坪は宮内省のものとなり、今は豊島が丘御陵とよばれて皇族関係の墓地となる。そして、のこりの二万坪は共同墓地となり、大隈重信や山縣有朋、大久保利道、大山巖などといった明治の元勳たちが眠る。

1970年代、この寺院の本堂から油彩画が発見された。正確にいえば、護摩で真っ黒になった絵があったことはわかっていたのだが、洗ってみると行方がわからなくなっていた明治時代の有名な絵画だった。原田直次郎の「騎龍観音」という絵画である。高橋由一の弟子であるこの画家は、ドイツに留学し森鷗外の小説のモデルになるなどして、大家になる。しかし、歴史から抹殺されてしまう。紫派とよばれる黒田清輝を筆頭とする絵画集団の、ヤニ派とよばれる原田らへの粛正の結果である。抹殺された寺院にひそかにねむる抹殺された絵画である。この絵は2007年に重要文化財に指定され、竹橋の東京国立近代美術館に護国寺寄託として保存、展示されている。

本田晴彦（「デッサン入門講座」担当）

東京の稲荷神社

最近、よく東京の稲荷神社にお参りしている。私は稲荷信仰に関心があり、これまで主に農村部の稲荷講や屋敷神のお稲荷さんなどを調べてきた。では、東京の稲荷信仰は江戸から「東京」となつてどう変わったのか、すこし興味をもったのである。天保九年に刊行された斎藤月岑による『東都歳事記』の二月「初午」の項には「江戸中稲荷祭、前日より賑へり」と記され、王子稲荷や妻恋稲荷をはじめ多くの稲荷神社の名が挙げられており、その賑わいぶりがわかる。今の新橋駅付近にある烏森稲荷や日比谷稲荷は、参拝者があるだけでなく神輿の「御旅出」もあった。

東京の稲荷詣をしていて気づいたことは、神社名の多くが「○稲荷神社」でなく「○○神社」となっていること。そして一部の稲荷神社を除いて二月初午の参詣者が少なくなり、その代わり神社の例大祭が五月に行われることが多くなっていることである。烏森神社や日比谷神社の例大祭も明治以降は初午ではなく、五月となった。これには改暦の影響があり、旧暦の二月初午に比べ、新暦の初午はまだ寒く、初夏である五月に移っていった。社名から「稲荷」がなくなったのは、多くの人が参拝する稲荷神社から、地域の鎮守神へと性格が変わったのかもしれない。もう少し稲荷神社を中心に東京を歩こうと思っている。

牧野 眞一（二松學舎大学非常勤講師「庶民信仰の世界」担当）

名跡を訪ねる楽しみ

昨年、淑徳大学のフィールドワークで築地本願寺を訪ねました。築地本願寺には、参拝者から観光客まで、毎日多くの方が訪れます。その数、一か月でおよそ三万人といわれています。

私たちが訪問した六月四日は、二か月かけて新潟県居多ヶ浜から築地本願寺までの道のりを僧侶や門信徒（檀家）の方々が、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人ゆかりの御旧跡をまわりながら歩いてゴールする日に当たりました。

居多ヶ浜は、親鸞聖人三十五歳のとき朝廷によって念仏が停止され、罪人として流された地です。その後、赦免されますが、同じく流罪の身であった師・法然聖人が往生されたことで、親鸞聖人は京都には帰らず、しばらく越後にとどまり、やがて妻子を伴って関東へ赴かれました。越後から関東に移り住んだのが四十二歳のとき、昨年の八〇〇年に当たったことから、「親鸞聖人のみあとを訪ねて、越後から関東へ歩く」という行事が催されたのでした。

教室から出ての学びは、自身が想定する以上のものがあり、多くのご縁に導かれての出会いとなります。今年は六月二十四日に、関東で親鸞聖人の教えを受けた平塚入道が開基した善福寺（神奈川県大磯町）を訪ねます。いまからどんな出会いがあるか楽しみです。

前田 壽雄（「親鸞の世界」「教行信証」信巻
を読む」担当）

うぐいす—幻の鳥

うぐいすは不思議な鳥である。

日本人は子どもでもその名と鳴き声を知っている。春告鳥はるつげどりの名のとおり、春になると梅の花に来て、ホーホケキョと鳴くものと思っている。ところが、梅の花といっしょに写真に写っているのは、大抵がメジロである。

鶯餅は黄緑色のアン餅である。あれが鶯色と皆思っている。ところがウグイスは、やや緑がかってはいるものの、地味な灰茶色をしている。黄緑色の背中はメジロである。その緑色の背と目の周りを彩る白い輪はおなじみの姿である。

声はすれども姿は見え、ほんにお前は……。滅多に姿を見せない鳥である。

鶯の身を逆さまに初音かな 其角

鶯の枝ふみはずす初音かな 蕪村

雀より小さい体で、山々にこだまするほどの声で鳴く。芭蕉は、声以外に注目した。

鶯や餅に糞する椽えんの先

また、古歌に「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老おいくるやと」（古今集・源常とよむね）があり、「伊勢物語」一二二段では、この歌をふまえて、春雨に濡れる人に、鶯が梅の花で作る笠を着せてあげたいと詠みかけ、さらに芭蕉は、

うぐいすの笠おとしたる椿哉

と、梅花ならぬ椿の花を笠に見立てた。

以前、鎌倉の東慶寺境内で、すぐ近くに聞こえたことがあつ

た。

山田喜美子（「伊勢物語」「芭蕉を読む」）
「徒然草を読んで人生を感じる」「百人一首を楽しむ」担当

消えていく？ 鼻濁音を残したい

最近の若者たちの歌う歌詞と歌声を聞いて、思わずハッとした。若い世代が「鼻濁音」で発音しなくなる傾向にあるといわれている中、特に顕著に感じる「くがーっ」というフレーズ。その度に「ああ！きつと作詞家は意識していないのだろう。勿論、作曲家も」と思うのだ。

「ガ行」というと一種類であるが、発音は「濁音」と「鼻濁音」二種類ある。「濁音」は通常の日常生活で普通に使用されているので、無くなる可能性は低い、音を発する際に鼻から空気を抜くところが特徴の「鼻濁音」、つまり、分かりやすく書くと「んが」「んぎ」「んぐ」「んげ」「んご」は無くなる傾向ということだ。これまで、当たり前前的事と思っていた「鼻濁音」。日本語の中でも優しい響きの発音と言われているのが、「ガ行」の鼻濁音なのだが、消滅も「世につれ…」ということか？

先般、「鼻濁音」が無くなってしまふ可能性があると発表された。国立国語研究所の調査（二〇〇九年）では、日常生活の中で「鼻濁音」を使う人は五人に一人しかいないそうで、来世紀には東北地方で少し残るだけでそれ以外の地域では存在しな

くなるという。日本語の伝統ある「鼻濁音」の発音は一部の言葉を抱うアナウンサーなどの職業人のものではなく、やはり日本人全体の問題であろう。人の言葉の発達段階での「教育」が益々必要とされるのではないだろうか。

吉田いち子（「ステップアップ塾議講座」）
「コーディネーター」

LEDが照らし出す人生の意味と構造

LEDを見た。“Light Emitting Diode”（発光ダイオード）である。日本では、高齢者による自分史の自費出版が流行っているとのことだ。高齢者の私には、LEDが一瞬“Life-Education-Death”と映った。そして、その光で、人の一生の意味と構造の核心を照らし出す含蓄が閃いた。“LED”：人間は受胎・誕生以来、生（Life）を享け、生を生きる。生まれれば、直ちに「死ぬ資格十分」ともなる。生と死は表裏一体。死（Death）が生を意味づける。生と死の間に、人間は、多種多様な「間」を生きる。時間、空間、人間、世間、…。世界内存在の人間は、多種多様な旧世界から新世界へ間の移行を積み重ね、自らの多元的世界を豊饒化する。この移行こそが教育なのだ。蘆田恵之助の教育遺訓「共に育ちましよう」も想起される。「教育」(Education)のラテン原語は「導き出し」と「導き入れ」を意味する。教育は「共育」で「共生」だ。生と死の間、人間は、「生きた挙動」と「死を回避する挙動」(O.S.Wauchope)を具

体化し、多様化し、構造化し、体得して生きて行く。美味を享受する挙動が前者、良薬の苦みを耐えて服する挙動が後者。教育は旅となる。家康の人生を旅に擬えた比喻にも呼応する。LEDは人生の意味と構造の核心に光を当ててくれた。

吉田 章宏（東京大学名誉教授「自分と他人を理解する道を求めて」担当）

戦後七十年

数年前から、折に触れて靖国神社に参拝している。

ご存知の通り、靖国神社頭には英霊の遺書が月替わりで掲げられている。

数ヶ月前のことだった。参拝を終えて、社頭掲示の前を通ると、三十代位の夫婦がそれを読んでいる。靖国では当たり前の景色である。だが、次の瞬間、男性の方が「現代語訳してくれたいのにな」と口にすると、その言葉に、女性の方も頷いた。掲げられていた遺書が、漢文訓読調のものであったのである。

もうここまで来たか。私は、深く落胆した。

言葉とは、意味だけ理解されればよいというものではない。書き手が選択した文体は、それが書かれた時の状況を、言葉の意味を超えて私たちに訴える力を持つ。つまり、漢文訓読調で書かれた遺書を現代語訳してしまつては、英霊がその文体を選択した状況が切実なものとして伝わることはないのである。

わずか七十年前、私たちが子孫に国を残すため自らの命を投げ

出した人々の遺書が、当時の言葉では伝わらなくなつてしまつている。父祖の世代との断絶が、静かに深く進行しているのである。国語・国文学に携わる者として、誠に忸怩たる思いを禁じ得ない。

私たちが戦後世代は、これまで一体、何をやってきたのだろうか。

渡部 修（「折口信夫と古代研究」担当）

